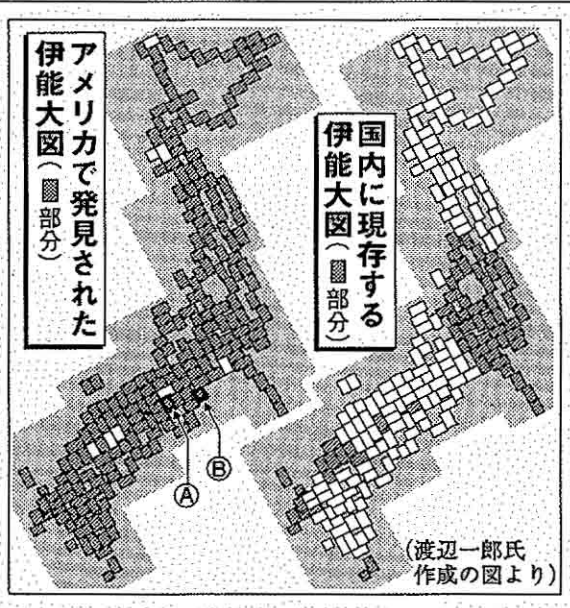
「伊能大図」206枚 米にあった

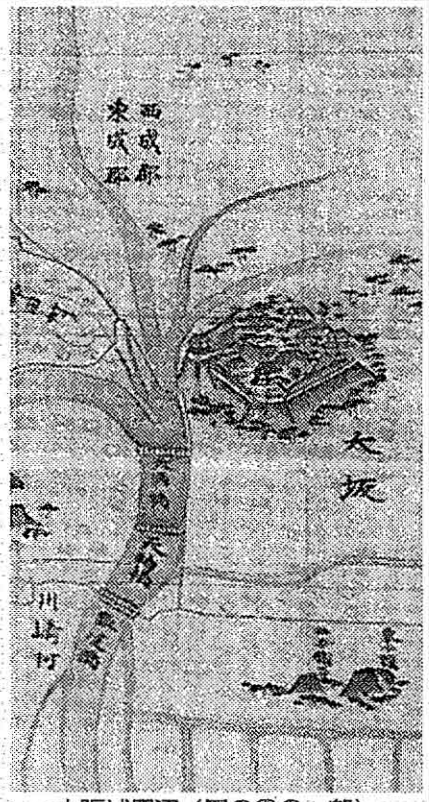
全214枚中 未確認あと6枚

研究者が「写し」発見 測量全ぼう明らかに

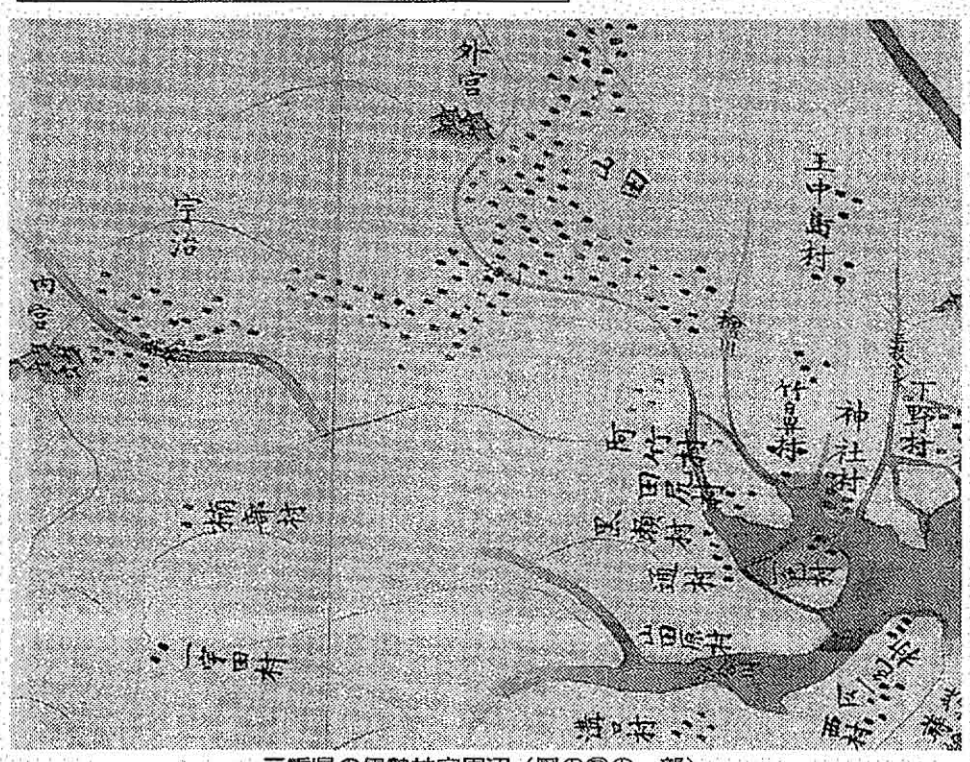
江戸時代の測量の大家・伊能忠敬(一七四五―一八一八)が中心となって完成させた「大日本沿海輿地全図」の「大図」二百十四枚のうち二百六枚の原寸大の写しが、ワシントンの米国議会図書館で発見された。大図の正本、副本はともに焼失したとされているうえ、写本も関東、西日本などで約六十枚しか見つかっていない。これで未確認のものは六枚を残すだけとなった。現地で確認作業に当たった専門家は「伊能の測量作業の全ぼうを明らかにする画期的な発見」としている。



(渡辺一郎氏作成の図より)



大阪城周辺(図のⒶの一部)



三重県の伊勢神宮周辺(図のⒷの一部)

大図の写しは、東京・文京区の伊能研究家・渡辺一郎さん(71)が発見し、国土地理院関東地方測量部(東京・千代田区)で四日、鈴木純子・相模女子大講師、永井信夫・日本地図センター理事とともに記者会見した。

渡辺さんらによると、大図の写し二百六枚は、同図書館地図部に保管されていた。いずれも和紙製で、畳一枚程度の大きさ。国内で見つかっている大図と比べたところ、山の彩色や建物の描写など装飾的要素がかなり省略されているものの、実測ルートが赤線で克明に示され、地形、地名、地図符号なども、正確に写されていた。

表紙に一―二百十四の通番と各地域の名称が書かれており、一部に「第七軍管」などの記入もあった。また、鉛筆で方眼が引かれたり、二つの地図を連結させる指示が赤字で書き込まれていたことなどから、渡辺さんらは「明治初期に陸軍が地図作成の基礎資料として使い、作業終了後に国外流出したのではないか」と推測している。

渡辺さんが、大量の写しの存在に最初に気づいたのは今年三月末。アメリカ旅行中に同図書館を訪れ、①アンティークマップ②手描き③色彩は四色④日本の全体または部分――という四条件で閲覧を申請したところ、女性学芸員が何度目かに取り出した古地図の中に二百六枚の大図があったという。

このうち五、六枚を開いて、「伊能の地図に間違いない」との印象を持ったが、その時は時間がなくいったん帰国した。

その後、鈴木講師、永井理事と三人で、正式に調査に訪れた。六月十八日―二十二日の五日間、計四十時間かけて二百六枚すべてを詳細に調べ、測量ルート、地名、地図符号の一致などから、大図の写しに間違いないと判断した。今回欠落している八枚のうち、二枚はすでに国内で見つかった約六十枚の中に含まれており、未確認の大図は、残り六枚となった。

伊能は五十一冊に上る詳細な測量日誌を残しているが、文章表現や当時の地名だけでは、具体的な測量ルートが特定できない部分も多かった。今回見つかった大図を日誌と突き合わせることで、史実のなぞが解かれることになる。

六月の正式調査に立ち会った同図書館の地図部主任のジョン・エベール博士は「そんなに貴重な品とは知らないまま保管していた」と話していたという。日本からの流出ルートは不明だが、同図書館に受け入れ記録が残っていないため、地図部が設置された一八九七年(明治三十年)以前に持ち込まれた可能性もあるという。

渡辺さんらは、二百六枚の大図を借り受けて、日本国内で展示することについても交渉中だ。

◇大日本沿海輿地全図

伊能忠敬とその測量隊による10次(1800―1816)にわたる測量成果をまとめた最終決定版。伊能没後3年余りたって、徳川幕府に提出された。214枚にのぼる大図の縮尺は3万6000分の1。幕府の正本は1873年(明治6年)の皇居火災、伊能家の副本は関東大震災で焼失したとされる。全国を8地域に分けた中図、3地域に分けた小図は国内、英、仏などで写しが見つかっている。1997年に気象庁の書庫で発見された大図43枚は国立国会図書館に寄贈され、博物館、大学など4か所にも計十数枚の大図が保管されている。

七五三 成人式 二婚礼
HAREGI MARUSHO
晴れ着の丸昌

夫婦刺殺

送迎車運転手逮捕へ

た。119番通報で、東京消防庁の救急隊員が駆け付けたが、地下駐車場内には二酸化炭素が充満しており、山口さんは酸欠状態で意識不明の重体。

警視庁本富士署で調べたところ、山口さんは車を駐車場のリフトに入れて外に出ようとしたが、別の車を駐車場から出そうとした山口さんの同僚男性(56)が駐車場の操作パネルに暗証番号を入力したため、リフトのシャッターが閉まった。リフトは山口さんと車をのせたまま下降し始め、

ロシア文学者 読売

読売 社会面